

月刊「わっは」

2009 10月 Vol.152

ワッハ上方
大阪府立上方演芸資料館

TEL 06-6631-0884 FAX 06-6636-1996

毎月末に梅田と難波で各一日、義太夫教室を受け持っている。始めて既に数年以上経つが、在籍25人ずつ位の生徒達の熱心さは、我が四十年あまりの太夫人生における想定外の出来事で、まさに「なんでやねん」だ。

文楽の太夫は義太夫節を語りながら、三味線演奏と共に人形芝居のストーリーやらセリフを展開していく。日本の古典芸能は全般に、江戸時代の270年にわたる鎖国＝平和がもたらした世界的文化遺産である。義太夫節も、師匠先輩方の想像を絶する修練を経て今日に至っている。義太夫らしい声が形成されるのに20年要するほど修業に時間がかかる。62歳の私などまだまだヨチヨチ歩きみたいなもの。世間のアラフォー女子や団塊世代男性にはとても手の出せる習い事ではない。

当初、義太夫を教えるというより、健康維持として、義太夫節の簡単な発声を体験していただく、という主旨で教室が始まった。が、事実は思わぬ展開となり、今夏、山本能楽堂で第4回発表会を開くまでに至った。「壺坂」と「酒屋」のサワリ、「いろは送り」などを経て、「大功記十段目」の前半の場をどうにか発声し続ける程度に成長してきた。今年の参加者は26人を数え、発表会前には三味線の竹澤団吾君と個人稽古でびっしり鍛えた。ひと節、ワンセンテンスの詞の音調にもチェックを入れる。稽古がノってくるとプロの弟子並みに厳しく叱ってしまう。単なるカルチャー教室の域をとくに超えている。

何十年も苦労してきた道だから、素人弟子が少しでも本質に近づくと、胸が詰まる瞬間がある。「よく勉強してきたなあ」と目頭が熱くなる。えもいわれぬ一体感が生じる。年齢や性別職業などを脱した境地。私も含めてだ。子供みたいになる。

残暑の能楽堂。橋がかりから出てきて舞台中央の見台の前に座り禱姿で語り出す愛弟子たちは今年も、別人のように輝いていた。

豊竹英大夫 ■ 文楽 大夫



とよたけはなふさだゆう

1967年三代竹本春子大夫に入門、翌年初舞台。祖父十代豊竹若大夫の幼名・豊竹英大夫と名乗る。1969年四世竹本越路大夫の門下となる。2003年第22回国立劇場文楽賞文楽優秀賞ほか多数受賞。海外公演や様々なイベントを精力的に行っている。

● 公演情報 ● 浄瑠璃と落語の会

日時：10月24日(土) 18:30開演 場所：ワッハ上方 5階 ワッハホール

出演者：豊竹英大夫、鶴澤清介、笑福亭松雪、笑福亭生雷 ほか ※公演の詳細は中面をご覧ください。